

滋賀の文化情報誌

デュエット

Duet

2020 夏 vol.135

特集

信楽伝統産業会館 リニューアルオープン!



新撰 淡海木間権 80

海鼠釉火鉢

INFORMATION STATION 催し案内 2020 夏

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

信楽伝統産業会館 リニューアルオープン!



旧館と同じく、外壁の全面には、
信楽焼のタイルが用いられている

多くの窯元（製陶所）が軒を連ねる焼物の町・信楽の中心部に、昭和52年（1977）、信楽焼の魅力を発信する施設として開館した信楽伝統産業会館が、令和2年（2020）4月28日、約150m東に新築移転しました。

新型コロナウイルス感染症防止のため、移転当初から見学が休止されていましたが、6月1日から開館。新展示の見どころなどをお聞きました。

■信楽伝統産業会館

住 所 甲賀市信楽町長野1203

連絡先 TEL 0748 (82) 2345 FAX 0748 (82) 2551

休 館 日 木曜日（木曜日が休日の場合は翌日）、年末年始

入 館 料 無料

駐 車 場 100台（信楽地域市民センター横）

アクセス 信楽高原鉄道「信楽駅」下車、徒歩3分／新名神高速道路「信楽IC」から車で約10分



駅に近く、駐車場も広い、 信楽の玄関口といえる場所に完成しました。

信楽伝統産業会館 館長 奥田琢也さん

将来的には国道307号バイパスの完成も視野に

信楽伝統産業会館は、40年以上の歴史をもつ館です。まずは、その成り立ちについてご説明いただけますか。

奥田 この館の運営委員会は、陶器をつくる組合と販売する組合と商工会、観光協会、そして行政からそれぞれ委員を出して組織されています。

昭和50年（1975）9月に信楽焼が通産大臣指定の伝統的工芸品になったのをきっかけに、「展示館をつくろう」ということで、翌年、当時の信楽町を主体に信楽町伝統産業会館建設促進協議会が発足しました。そして、国と滋賀県と業界がそれぞれ建設費を負担する形で、昭和52年（1977）11月に完成したのが、旧館です。

——今回の移転は、どういった経緯で？

奥田 旧館の建物自体の老朽化もあるのですが、一番の問題は来館者の多くが自動車でお見えになるのに、駐車場が6台程度しかないことでした。新館のできたこちらの土地も駐車場として利用可能だったの

ですが、雨の日などに歩いていただくにはちょっと距離がある。そこで、信楽地域市民センターの建て替えとあわせて、移転新築することになりました。

信楽駅からも近くなりましたし、こちらの方が明らかに利便性は高いと思います。また、将来的な計画として国道307号のバイパスが東側、大戸川の向こうを通る予定なんです。そちらが完成すれば、東側が正面になるように考えてあります。

——館内の紹介をお願いしますか。

奥田 入館していただいて、エントランスホールの右手奥のスペースは、ゴールデンウィークや10月の「信楽陶器まつり」の期間などに、伝統工芸士の方に轆轤細工の実演をやっていたくコーナーにあたります。新型コロナウイルスによる休館で、今年のゴールデンウィークでは実現しませんでした。

——受付カウンターは、信楽町観光協会のインフォメーションになっているのですね。

奥田 最初に述べたように、館の運営に参画している観光協会が1階に、2階の1室には商工会が置かれています。

まっすぐ進むと地域市民センターにつながっている廊下の右に「信楽焼ミュージアム」、左に「企画展示室」があります。

「信楽焼ミュージアム」は、京都市立芸術大学の畑中英二教授

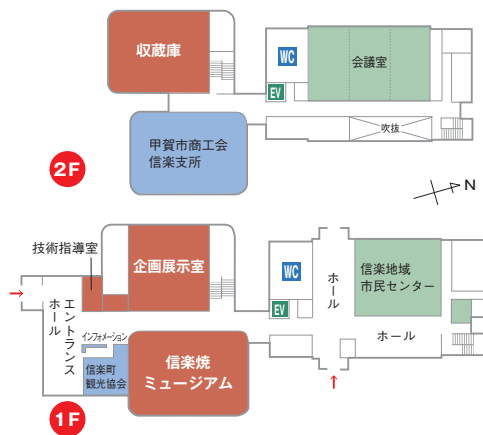
↓取材時も館入口には消毒液が置かれ、マスクをした信楽狸がお出迎え



※1 伝統工芸品 昭和49年（1974）に制定された「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」に基づき、主として日常生活の用に供されている、製造過程が手工業的であるなどの要件を満たすもので、現在、滋賀県では信楽焼、近江上布、彦根公壇の3件が指定。

に展示監修を行っていただき、信楽焼の歴史をわかりやすく学べる場になっています「5ページからのインタビュー参照」。

「企画展示室」は本来であれば、信楽で活躍する窯元、作家さんの作品を展示するギャラリーとして用いる場なのですが、ひとまず「収蔵品展」として、館蔵の信楽陶芸展入賞作品を展示しています。和のものから現代的な作品までバラエティーに富んだ作品をご覧ください。



— 今では新型コロナウイルスの影響でストップした状態かと思いますが、外国人旅行者への対応はございますか。

奥田 海外からお出での方用には、T-V O-X (ティボア) というフリーアプリをお持ちのスマートフォンにダウンロードしていただければ、展示パネルのコードを撮影すると、英文の文字解説を読み、音声解説を聞いていただくことができるようになります。

2月には1年分の入館者数があった「スカーレット効果」

— 最近の信楽が注目された話題といえば、NHKの朝の連続テレビ小説「スカーレット」の放送がありますが、リニューアル予定が重なったのは……。

奥田 まったく偶然です。新館の建設計画は平成28年(2016)にはできていたもので。

— 「スカーレット効果」はありましたか？

奥田 ありました(笑)。去年の9月から始まって、旧館で12月から「スカーレット展」を開催していたのですが、2月の入場者数はいつもの年間入場者数に匹敵するぐらいになりました。およそ2万1000人。



↑信楽焼の歴史を学ぶことができる「信楽焼ミュージアム」

なっています。



↑展示パネルにそえられた翻訳アプリ用のコード

空き地の駐車場を借りて対応していましたね。

— それが、途中から新型コロナウイルス問題でしぼんでしまっ……。

奥田 残念ながら。けれど、たくさん問い合わせのお電話などをいただいたので、旧館の方では継続の展示が7月10日から行われる予定です。

また、「スカーレット」で、主人公たちが大きな松明を担いで奉納する印象的な場面として登場した「しがらき火まつり」は7月25日に予定されていましたが中止が決まりました。

— 「スカーレット」では主人公が火鉢の絵付けをしますね。当時の火鉢というのはどういう存在だったのですか。

奥田 あのドラマの時代は昭和30年代初めで、私の記憶にある小学生の頃はもう少し後になるのですが、すでに石油ストーブもありましたが、火鉢の上に鉄瓶をかけておいて、お客さんがあったら煎茶を入れてもてなすというのが、普通でした。ストーブの上に鉄瓶では景色的にもマッチしませ

※2 「スカーレット」 信楽を舞台に女性陶芸家の半生を描いたNHK連続テレビ小説。2019年9月30日から2020年3月28日まで放送。

←「信楽焼ミュージアム」には、「スカーレット」に出演していた信楽狸も作例として展示されている



んから、そこはやっぱ火鉢。「スカーレット」では絵付けを行っていましたが、信楽で一番有名だったのは海鼠釉と呼ばれる紺色のものです[9ページ参照]。
— 火鉢の後の製品というと何になっ……のですか。

奥田 私が大学を卒業する頃くらいまでに、火鉢に代わって植木鉢が主力商品となりました。植木鉢も海鼠釉のものや絵付けをしたものなどいろいろあったのですが、やがてプラスチック製が普及し、オイルショックの影響もあって、下火になっていきます。次に登場したのは傘立てなどでした。

それから、食器や狸などの置き物が注目され、今日に至っています。

— 流れとしては、大きなものから小さなものに変ったのですか。

奥田 いいえ。大きなものを作る技術は、陶器のお風呂(浴槽)などに生かされています。当時、植木鉢まではエクステリア(屋外品)で、その後はインテリア(室内装飾品)に移行したと言われましたね。食器以外でも花瓶などが、結婚式の引出物になったりして。

現在は、再びガーデンセットが人気商品に加わるなどして、エクステリアとインテリアの両方という流れになっています。

「ちょっと懐かしい感じ」をテーマに 1970年代の信楽を再現しています。

京都市立芸術大学 教授 烟中英二さん

信楽焼の多様性を感じてもらいたい前半部

信楽という町との関わりを、まずご紹介いたしますか。

烟中 私にとって信楽との関わりは、研究対象として始まりました。とりわけ滋賀県文化財保護協会に勤めていた頃、新名神高速道路の建設にともなう信楽谷北端地域に分布する中世・近世の窯の発掘調査にたずさわったことは大きな出来事でした。やがて昔のものだけではなく、そこから現在につながる道行きも研究の対象となっていく。今では現在活躍しておられる陶工の方々とも親しくさせていただいています。

館のリニューアルにあたって、展示の監修の依頼があったのは、いつ頃ですか。

烟中 大学に移って、すぐくらいですね。

旧館の方では、製造工程で使う道具類の展示などはなかったそうですが。

烟中 そうなんです。展示スペースの問題もあってのことですが、作品主体でした。そこからでも信楽の魅力はわかると言えはわかるのですが、伝統産業会館という性格

からいえば、実際につくっている、つくり上げられていく工程を見ていただけるコーナーが、やはり必要だろうと考え、そういった要素もつけ加えるよう提案しました。

時代順に工夫なさった点や伝えようとした視点も交えてご説明いただけますか。

烟中 今回は信楽駅の近くに引っ越してきてということもあるので、最初の入口としてコンパクトにまとめつつ、信楽焼の多面性も理解していただくこととしたのが苦心したところでしょうか。

あまり情報量が多過ぎてもいけないと。

烟中 そうなんです。ご覧いただきたいものはたくさんあるのですが、そこは留意しました。時系列的に並べるのは当然なのですが、信楽焼といえは、焼き締めといいますが、釉薬をかけない、ざくとした表情のイメージが強い。けども、実はものすごく多様で、磁器以外のものなら何でも、小さいものから大きいものまでつくってきたことを表現しようと思いました。

パネル写真は50年前にアメリカ人研究者が撮影

白黒写真のパネルを背景に、さまざまな道具が並んでいて興味をそそられます。

烟中 信楽焼をつくるための道具、つくっている様子、出荷の様子などを、



↑江戸時代に生産された色鮮やかな施釉陶器

ですから、入っていただいて、焼き締めの茶色いものばかりが並んでいるのではなく、カラフルな感じで、「あつ、信楽はこんなものもつくっているんだ」ということを感じてもらえたらいいなと考えてまとめたのが、前半部ですね。

真ん中のコーナーでは、現代の作家さんの色のついた作品や焼き締めばかりではないバリエーションをご覧いただき、最後に、新たな要素としてつけ加えたのが、リアルな「煙突の街」を紹介するコーナーです。

1970年代ぐらいを再現する形で紹介しています。

もう使われなくなった道具もありますし、見られない光景もあるので、「ちょっと懐かしい感じ」をテーマに展示を組み立てました。

大きなパネルになっている白黒写真は



京都市立芸術大学美術学部
教授

烟中英二さん

はたなか・えいじ / 1967年、京都市生まれ。財団法人滋賀県文化財保護協会で信楽焼窯跡の調査にたずさわる。滋賀県教育委員会文化財保護課を経て、2017年より京都市立芸術大学准教授、2019年より現職。

どなたが撮影なさったものですか。

畑中 とてもよい写真ですよ。写真は、ルイズ・アリソン・コート (Louise Allison Court) さんというアメリカ人の女性研究者が撮られたものです。50年前に信楽を訪れ、いろいろな調査をなさり、『Shigaraki, Potters' Valley (信楽 陶工の谷)』という本も出版なさいました。彼女が撮影した写真を中心に、背景パネルとして使わせてもらっています。

展示されている道具類は、どこからお集めになったのですか。

畑中 残念ながら廃業なさった窯元さんから譲り受けたものや、調査にうかがったところでいただいていたものなどです。すべて実際に使われていたものです。

この展示と同時並行で、信楽の民俗文化財の調査もさせていただいていたので、それがうまく展示にもつながりました。

これまでの旧館では、道具類の収蔵品は、ゼロだったわけですね。

畑中 信楽であれば、そこら辺にいくらでもあるものでしたから、保存するという感覚はなかったでしょう。開館から40年経ってみると、道具の中には今でないと採取できない貴重な資料といえるものも出てきました。そういう意味では、学術的な使命感というものも、この最後のコーナーにはあります。

目立っているオート三輪も、半世紀前の運搬の様子を示しているわけですね。

畑中 信楽において、オート三輪の登場は革命的に物流の考え方を変えたんですよ。それまでは人力、ただただ人力だったんですから。

信楽高原鐵道が誕生して、JRに接続しましたが、それがない時代は、貴生川に向かってケーブルを引いて、製品を吊り下げ

て運んでいたこともあるんです。でも、落ちることもあったり。鉄道が伸びてくるまでは、やはり一番楽な方法で運ぶので、南山城(京都府)を抜けるルートがとられていました。北の天津などへは向かわず、南へ進んで木津川を上ってどうのこうのという江戸時代の文書が残っていたりします。

滋賀県内で売られるには、ものすごい遠回りをしていたんですね。

畑中 そうなんです。それが、オート三輪などの登場で、個別に大きな窯屋さんがほとんどいろんなところに運んで販売する展

では、それぞれの道具についてご説明いただけますか。

畑中 このコーナーにあるものは、信楽にお住まいの方にとっては当たり前のものなんです。ですから、地元の人には「いやいや、こんなじゃなくて、これの方がおもしろいやろ」と言われたりもしたのですが、「あなたたちの当たり前は、信楽以外に暮らす人たちにとってはものすごく珍しいものだから」と言い続けて選びました。

農業用の民具は、あちこちの民俗資料館で見覚えがあるのですが、本当にこの辺の道具類はわからないですね。

畑中 滋賀県だったら、ここにしかないわけですから。

その普通のご飯を炊くお釜に見えるものも製造工程で使うのですか。

畑中 これは本当にただの釜なんですよ(笑)。ですが、轆轤をひく作業などでは必ず手が届く位置に置かれているんです。水を入れて、指を湿らせるために。

どんなお釜さんでもいいわけではなく、口の内側に折り返しがあるものが選ばれます。こう、ピイツとひいていって指に残っ

開が出てきたんです。

ちなみに、運搬中に壊さないようにする縄の縛り方も、なかなか奥が深くて、『陶磁器の縛り方』という本まで出ていたほどです。さかのぼれば、シルクロードの場合、大きな壺の中に小さな壺を入れ子にして、動かないように泥を詰めて運んでいました。重量は重くなるんですけど。

段ボールを使うのは現代の、いわば最終局面ですね。それから、巨大ブチブチ(気泡緩衝材)をあてて、ラップフィルムをぐるぐる巻くやり方もよく見かけます。

信楽にお住まいの方にとっては当たり前のもの



↑右手前が「トンボ」、左中央が「シッタ」

た粘土をキュッキュッと折り返しの部分でこそぎ落とすために。「もうこれがないと仕事ができん」とおっしゃるぐらい大切な轆轤とセツトの道具です。

なるほど(笑)。では、十字のものは。

畑中 これも気になりますよね。これは「トンボ」というんです。確かにトンボみたいな形をしているんですけど、ここからここまでが深さ、これが口径にあたります。仕上がり寸法が何寸何分の大きさの湯飲みをつくってくださいという発注があったとし



「信楽焼ミュージアム」の「隆盛期」展示。
近代以降の主要製品と道具類が並ぶ



↑ゼーゲルコーン。800～1250℃以上の高温となる窯の中の温度を知るために、ドイツの科学者、ヘルマン・ゼーゲルが発明。三角錐の部分が決められた温度になるとグニャリと曲がる。写真は使用済みのもの

ます。粘土の状態だったらもっと大きいので、収縮率を計算して、サイズに合わせたトンボをつくるわけです。

収縮率というのは、まず乾燥した時に縮んで、さらに焼いたときに縮む、その割合が土ごとに決まっているんです。

——**続いて、それ自体が一種のオブジェのような形をした、白いものは何ですか。**

畑中 これも気になりますよね(笑)。「シッタ」という道具で、轆轤でまず口が上に向けた状態でひいて、最後に底面を削って仕上げる必要がある場合、まず轆轤からはずして半乾きの状態にしたものをひっくり返して、口の側を「シッタ」に力パツとかぶせ、底面を成形します。これなどは、日常生活からはちょっと遠いですよね。

——**こちらの道具は、奥田館長へのインタビュの際に教えていただきました。高温の窯の中の温度を知るための道具ですね。**

畑中 「ゼーゲルコーン」といいます。これを何種類か溶ける温度の違うものを並べてやるとおもしろいんですよ。倒れそうなのに「いや、俺はまだ倒れへんで」というやつから、「まだ全然大丈夫」みたいなやつが並んで、それぞれ個性があるかのようになって(笑)。

それからこの藁で編んだ鍋敷きのようなもの。これは火鉢などをつくって乾かす時の台で、太陽の方向に合わせて、ヒマワリ

の花みたいに少しずつ回転させて乾燥させるための道具です。あまり早く片面が乾いてしまうと、割れてしまったりします。

——こちらには、ちょっと近代的な道具がありますね。

畑中 エアーコンプレッサーを使って施釉（せゆう）する時に用いるガンです。もう50年前の時

豊かな土壌の上にさまざまな花が咲いている時代

——こちらのコーナーには、できあがった製品が並んでいます。かつては鉄道旅行に欠かせなかった汽車土瓶（こしびん）もありますね。

畑中 近代（明治以降）の製品をピックアップさせてもらいました。この陶製管などは、信楽が一大産地でした。近江化学陶器という会社を取り扱っておられて。

——化学薬品を用いる場で使われたのですか。

畑中 金属管だとすぐに穴が開いてしまうような酸に対しても、陶器は強いわけです。

例えば、明治政府が大阪に造幣局（きざいきょく）をつかった時などは、信楽で耐酸陶器をつくったようです。金貨を洗う時に硫酸などを使うからです。戦時中の例でいえば、陸軍が広島県の大久野島（おおくのじま）で毒ガスを製造していた工場では、陶製の容器などが使われました。いま残っているものは京都製ですが、同じものを信楽でもつくっていたそうなんです。

——かと思うと、そばには大きな徳利（ちちり）も並んでいます。

畑中 そのように日用品から工業用品まで何でもつくっていた信楽ですが、二つ欠けていた部分がありました。一つは磁器（じし）をつくらなかった。もう一つは、絵師（えし）がいなかった。ですから、ボディーだけつくって、京都で絵付けをもらう地域分業が成立していました。もともとこの手の薄づくりの陶器をつくる技術自体が京都から来ている

点でありました。

釉薬（ゆうやく）を霧状もしくは粒状に吹きかけるための道具で、釉薬を入れた流し缶（タンク）

につながったゴム管の先に出てきた液を、エアーコンプレッサーが噴出するエアーで吹きつけるんです。

——最後に大阪万博の「太陽の塔」の顔、岡本太郎の作品が置かれています。岡本さんといえば、ドラマ「スカーレット」で西川貴教（たかみ）さんが演じたジョージ富士土川（ふじつち）のモデルですね。

畑中 1970年最大のイベント、大阪万博のシンボルだった「太陽の塔」の背面の陶板（たうばん）リーフは、信楽製だったんです。

その隣にあるのが、平成28年（2016）に解体された滋賀会館（大津市）の壁面に使われていたタイルです。私は当時、すぐ隣の県庁にいたので、施工業者に、「サンブル（サンブル）としていただけますか」とお願いして入手できました。信楽でタイルをつくり始めたきっかけは、昭和29年（1954）に竣工した滋賀会館の建設だったんです。

それを機会に、信楽でもタイルをつくる



↑滋賀開館外装タイル（左）と「太陽の塔『黒い太陽』（レプリカ）」（右）

※3 滋賀会館 昭和29年（1954）開館の複合文化施設。映画館、結婚式場などとして県民に親しまれたが、平成25年閉鎖。

ようになりました。先ほどの耐酸陶器をつくっていた近江化学陶器（えいけい）が取り組み、昭和34年（1959）には新たに建設した外装タイル専門工場（えいけい）で製造を始めています。あわせて東京進出もはかり、旧銀座松坂屋の外壁（げい）タイルを受注しました（昭和39年に完成）。その工事打ち合わせの場に色彩関係（しきり）のアドバイザーとして招かれていたのが岡本太郎（おかもと）で、ここから岡本と信楽の長い付き合いが始まったわけです。

その後、大塚オーミ産業（おおつか）では巨大陶板（たうばん）を製造する技術も培われていきました。世界の名画（めいが）を忠実に再現（さいげん）した大塚国際美術館（おおつかこくさいびいじやう）（徳島県鳴門市）の「陶板名画（たうばんめいが）」も、岡本との切磋琢磨（せつさくさくま）から技術（ぎじゆつ）が展開（てんがく）していったのだと聞いています。

まず、量（りやう）一量（りやう）分（ぶん）ぐらゐの陶板（たうばん）をそろさずにつくるという技術（ぎじゆつ）だけでもすごいのですが、さらに驚（おどろ）かされるのが釉薬（ゆうやく）研究（けんきゆ）によって可能（か）となった色の復元（ふくげん）力（りき）です。

じつは、あの陶板（たうばん）を「信楽焼（しんがきやう）」と言（い）ったら怒（おどろ）かれるんですけど（笑）、信楽（しんがき）で生（な）み出（だ）されたものであることは確か（しやう）です。現在の信楽（しんがき）は、豊かな土壌（どじやう）の上にさまざまな花（はな）が咲（さ）いていつている時代（じだい）ということだろうと思います。

——三代（さんだい）代（だい）で来館（らいかん）なさったような場合（ばあひ）でも祖父母（そふぼ）と孫（まご）の間に会話（かいわ）が生（な）まれそ（な）うな展示（しやうし）でした。

畑中 ここであつと会話（かいわ）に花（はな）を咲（さ）かせていただいて、信楽（しんがき）の町（まち）へ繰（く）り出（だ）していただければあ（あ）りがたいです。

——本日はお忙しいところ興味（きうみ）深いお話をありがとうございました。

信楽海鼠釉火鉢

日本六古窯の一つである信楽焼は可塑性に秀でた信楽の土を生かしての大物陶器づくりを得意としており、その一つである火鉢は江戸時代後半から生産が始まりましたが、当時は他産地製品に圧されて販路は思うように伸びなかったようです。そのような中、それまで中国から輸入された火鉢などに美しく揃った白萩釉の斑点が紺色の釉薬に散りばめられた「志那海鼠」と呼ばれた釉薬に



注目しました。すでに国内の各産地では、この海鼠釉を発色させる研究に取り組んでいましたが、失敗の連続であつたようです。

信楽でも明治の初めから、この釉薬の開発に取り組み、試行錯誤を重ねた結果、明治20年（1887）ごろには完成しました。また、大正9年（1920）には石膏型による機械ロクロ成型法が生み出され、正確にそろった形の量産が可能になります。同時にエアークンプレッサーを使った吹き付けによる海鼠釉の施釉方法も考案され、白萩釉の斑点が美しい火鉢は信楽の主製品として国内外に市場を拡大していきました。

そして、戦争の時代を経て、昭和20年（1945）からは戦後復興の波に乗って信楽の火鉢が飛ぶように売れ、好景気に沸きました。世の中が安定し始めた昭和20年代中ごろから石油ストーブが普及しはじめると、次第に火鉢の需要は減り、昭和30年代からは観葉植物の普及もあって、信楽焼の主産品は火鉢から主に海鼠釉を施した植木鉢へと移りました。

余談ですが、私は、昭和32年（1957）に小さな焼屋の子として生まれました。当時はもう火鉢の全盛期は過ぎていましたが、母親が吊り下げたタンクからゴム管を通して落ちてくる釉薬とエアークンプレッサーを巧みに使って真っ黒になりながら火鉢や植木鉢へ海鼠釉を吹き付け、それを父親や職人さんが釉薬がこすれて落ちないように気を付けながら窯詰をしていたことを覚えてます。

また、家の客間には海鼠釉の大きな火鉢があつて、鉄瓶にはいつも湯が沸き、そのかたわらで秋になれば栗を、冬になれば餅を焼いたことも遠い思い出です。

甲賀市信楽伝統産業会館 館長

奥田琢也

本展ではこの地の風土と伝統そして交流のなかで、活動を繰り広げる彼らの作品を紹介。その魅力に迫ります。

入館料: 一般500円、高大生380円、中学生以下無料

休館日: 月曜日 ※ただし8月10日、9月21日は

開館、8月11日は振替休館

■ギャラリートーク

7月19日(日)・8月16日(日)

午後1時30分～(1時間程度)

お問い合わせ先: TEL 0748 (83) 0909

企画展 腕足動物化石展 — 霊仙山地域の腕足動物 —

8月1日(土)～23日(日)

多賀町立博物館

多賀町内で見
つかる化石、腕
足動物っていつ
たい何なんだ？

見た目は二枚
貝っぽいけど、
まったく違うら
しい。

当館所蔵の腕足動物化石や、化石採集家・大八木和久氏寄贈の化石の大母岩などを展示し、腕足動物がすんでいた時代の環境を紹介します。

入館料: 16歳以上250円

休館日: 月曜日、毎月第3日曜日、祝日

お問い合わせ先: TEL 0749 (48) 2077



霊仙山地域産のアコサリナ

新型コロナウイルスの感染拡大防止の 対応について—— 滋賀県博物館協議会

全国的に緊急事態宣言は解除されましたが、第2波の拡大も危惧されており、依然として予断を許さない状況が続いております。滋賀県博物館協議会加盟館においても、引き続き展覧会やイベントの休止や時期の変更などの措置が取られています。

滋賀県内の博物館・美術館へご来館いただく皆さまにおかれましては、各施設ホームページで開館状況などをご確認いただくか、各館にお問い合わせください。また、マスクの着用、咳エチケットおよび手指のアルコール消毒等の十分な感染症対策を実施していただき、ご来館くださいますようお願い申し上げます。

第62回企画展 お城のリユース — 信長・光秀・秀吉・家康 — 7月18日(土)～9月13日(日) 滋賀県立安土城考古博物館



水口岡山城でリユースされた大溝城の瓦

戦国時代の近江には、守護である六角氏をはじめとして、明智光秀、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康も城を築きました。なかでも信長の安土城は、以後の城のモデルとなりますが、すべてがオリジナルではなく、既存の城だけでなく寺社もリユースしていました。本展では、天下人たちが築いた城を、リユースの視点でたどりながら、城の発掘調査で出土した資料、城の遺構や今も残るリユースされた城の建物を写真パネルで紹介します。

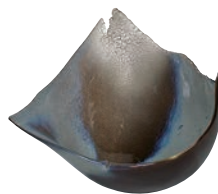
入館料: 大人600円、高大生360円、小中生無料

休館日: 8月31日(月)、9月7日(月)

お問い合わせ先: TEL 0748 (46) 2424

特別企画 湖国・滋賀の陶芸展 — 風土と伝統そして交流のなかで —

7月18日(土)～9月22日(火・祝)
滋賀県立陶芸の森 陶芸館



高橋政男「冬の華」
1966年
ホタケスタジオKANSE

古来より風光明媚な景勝地として、親しまれるとともに、良質の陶土を育み、豊かなやきもの文化をつくりだしてきた湖国・滋賀。そうした風土や伝統に魅せられ、今日でも幅広い作家たちが活動しています。

涼をもとめて — 中国絵画で納涼 —

開催中～8月30日(日)

観峰館



謝蘭生「荷亭消暑図」(部分)

水に泳ぐ魚、清らかな花、瑞々しい果物、深山の幽居…。本展では、観峰コレクションの中国絵画から、涼感を誘う作品を選んで展観します。夏のひと時、展示室にて視覚からも暑気を払っていただきたいと思います。

入館料: 一般500円、高大生300円、中学生以下無料

休館日: 月曜日(祝日の場合は翌日)

■土曜講座

「中国絵画の画題について②」

8月1日(土) 午後1時～2時

参加料: 500円(館内見学可) 定員: 20名

お問い合わせ先: TEL 0748 (48) 4141

歌川広重展 — 東海道五拾三次と雪月花 叙情の世界 — 開催中～8月30日(日) 佐川美術館



「近江八景之内 瀬田夕照」

江戸の浮世絵師・歌川広重(1797-1858)の名作「東海道五拾三次」をはじめ、花鳥画、戯画、さらには肉筆画に至るまでさまざまなジャンルを通して、広重の浮世絵ワールドを紹介します。

入館料: 一般1000円、高大生600円、中学生以下無料(要保護者同伴)

休館日: 月曜日(8月10日は開館)

お問い合わせ先: TEL 077 (585) 7800



北部九州の軍事遺跡と戦争資料

宗像沖ノ島砲台と本土決戦

花田勝彦 編著

A5判並製本 総498頁 4000円＋税

九州北部の砲台・防衛衛所と本土決戦準備の師団の陣地などを遺跡としてとらえ、実測調査により図面化、防衛省資料や市町村史、回想録ともあわせ、考古学的手法によってその実像に迫る。

はっぱいろの宝箱

滋賀県児童図書研究会 編

A5横変並製本 総176頁 1400円＋税

人間国宝の一龍斎貞水さんが来ることになった守山の中洲小学校。ヨシヒロは、皆の前で講談を覚えて披露することになるが……。本当にあった出来事をもとにした13篇のお話を収録。



淡海節

最後（さいご）の橋（はし）の音（おと）から始まる物語

今井 信 著

四六判並製本 総224頁 2000円＋税

大正から昭和にかけて一世を風靡した劇中歌淡海節の作者志賀遼家淡海。彼の手記をもとに芸能界での歩みをたどり、郷里堅田の歴史文化から歌い継がれる淡海節の魅力に迫る。

オリンピックの夏 新世界

安部良典 著

四六判上製本 総224頁 1500円＋税

昭和39年夏、東京五輪を間近に控えた大阪の下町で、浪人生の隆が出会った魅惑的な女性、昼からコップ酒をおある肉体労働者——。表題作ほか、「さよならの夏」など全7篇を収録した短篇集。



論理と集合

数学を理解するための基礎

辻 一夫 著

A5判上製本 総208頁 2800円＋税

大学の数学を理解するのに必須となる論理を解説し、論理を根幹として集合論が築かれ、その集合の上に各種の数学的諸概念が築かれていることを示す。大学の数学につまずく前に読んでおきたい一冊。

いがぐり三兄弟の伝説

石庭村の昔話とマキノピックランド誕生ものがたり

伊丹俊次 作・画

A5横並製本 総40頁 800円＋税

むかし、むかし、おばあさんが里山で拾ってきた大きな栗から、3人の赤んぼうが生まれました。成長した三兄弟は——。高島市マキノ町に住む著者による創作絵本。



行政経営改革の要諦

横山幸司 編著

新書判並製本 総188頁 1000円＋税

行政職員を対象とした「滋賀大学行政経営改革塾」の講義を書籍化。形骸化した政策評価や補助金などを見直したい、自治会やまちづくり協議会の運営で困っているなど、行政経営や地域経営に取り組む自治体担当者必読の一冊。

教育のあり方を問う

政策批判と「子ども事件」

山田 稔 著

A5判並製本 総160頁 1500円＋税

滋賀県内の高校で社会科の教員を38年間務めた著者が、現在の教育政策を厳しく批判する。「『上からの教育改革』を斬る」と「『子ども事件』を読み解く」の2章から成る。



東近江の戦国 六角氏と八日市庭

ようの 丁野永正 著

B6判並製本 総174頁 頒価1000円

問合先 東近江市建部瓦屋寺町134-25(著者)

中世の近江国守護・六角氏支配の下で商業のまちとしての礎を築いた八日市、両者の関わりを探るとともに、これをさかのぼる聖徳太子による開市伝説についても紹介。(2020. 6.16刊)



小笠原壽久翁 評傳

中澤伸弘 著

B5変形上製本 総162頁 非売品

問合先 八甲田神社事務所 TEL017(738)3033

八甲田神社創立者・小笠原壽久翁は、少年時代に病身となりながら、独自に宗教的世界を拓き、多くの神の啓示と箴言を残した。その数奇な生き方と宗教観をたどる。(2020. 6.19刊)



近江の画人 海北友松から小倉遊亀まで

石丸正運 編
B5変形並製本 総164頁 4800円＋税
近江ゆかりの55名の画人の事績と作品を集めた一冊。彼らの内面の葛藤や制作への意欲なども含め、作品鑑賞の参考情報を網羅。オールカラーで代表作を掲載。

多賀の本2 多賀はゾウの里だぞう

多賀町立博物館 編
B5判並製本 総80頁 1500円＋税
1993年に発見されたアケボノゾウの全身骨格化石によって、「ゾウの里」として知られる多賀町。2013年に新たな化石発掘を目指して始まった「古代ゾウ発掘プロジェクト」の、これまでの成果とあわせて紹介。



琵琶湖環境科学研究センターブックレット1 琵琶湖の科学2020 みずのこと・いきものこと

琵琶湖環境科学研究センターブックレット編集委員会 編
A5判並製本 総128頁 1500円＋税
これまで水質や生物のモニタリングによって蓄積されたさまざまなデータを、一般向けに紹介することを目的に刊行されたシリーズ第1弾。

おおのしん 詩の立会人 大野新随筆選集

大野新 著／外村彰・苗村吉昭 編
四六判上製本 総308頁 2800円＋税
滋賀を代表する詩人大野新の逝去から10年。遺された随筆を「人生の感懐」「名所旧跡行」「文学をめぐって」の3部構成で編み込んだ珠玉の随筆選集。



おうみ 淡海文庫 65 現代語訳 近江の説話 伊吹山のヤマトタケルから三上山のムカデまで

福井栄一 著
B6判並製本 総166頁 1500円＋税
『今昔物語集』『古今著聞集』など近江を舞台とした説話17編を現代語訳。想像力豊かな説話の舞台となった場所や人物についても紹介。

淡海文庫 66 近江の地名 その由来と変遷

京都地名研究会 編著
B6判並製本 総216頁 1500円＋税
かつて大津宮があり、渡来系氏族の多い近江には歴史に関わる地名が多くある。『和名抄』、条里、木簡など古代地名から山岳、城下町、街道、難読地名に至るまで多方面から近江の地名を詳述。



えきしんやまいよけ 疫神病除の護符に描かれた がんざんだいし 元三大師良源

疫神退散! 角大師ムック編集部 編／福井智英 執筆
A5判並製本 総32頁 900円＋税
平安時代の僧・元三大師良源は、鬼の姿となり疫病を退散させたという。その「角大師」としての姿がお札に描かれ、今も信仰の対象となっている。その伝説と生涯を護符を交えて紹介。

東アジアの「伝統の森」100撰 山・川・里・海をつなぐ森の文化

園田稔 監修／イ・チャンジ 編著
A5判並製本 総288頁 3200円＋税
日本70カ所、韓国20カ所、台湾10カ所の「伝統の森」の由来と祭礼、植生を調査し、貴重なカラー写真とともに収録。「親森・親水」の観点から、自然と共生する文化の再認識を図る。



表紙写真 信楽伝統産業会館「信楽焼ミュージアム」の【隆盛期】展示

編集後記 2月末から5月にかけて、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、滋賀県内博物館・資料館・美術館でも臨時休館が行われ、多くの企画展や催し中止もしくは延期となりました。当初、ゴールデンウィーク期間に予定していた信楽伝統産業会館への取材も約1か月遅れに。7月上旬現在、館によっては、不特定多数の方が手に取るチラシなどの配布物を撤去なさっているところもあり、本誌もお手元に届く数が減るかもという不安を抱きながらの発行です。㊦

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1
サンライズ出版株式会社 Duet編集部
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。
<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先